

アドルノ社会学の「表現」的性格 ——「経験」と「経験的なもの」のフィクション的再構成——

立教大学 片上平二郎

この報告では、セッションの「社会学理論と〈経験的なもの〉の再構成」というテーマを、テオドール・W・アドルノの社会学的立場からの考察を行う。アドルノは「実証主義批判」という立場で知られるように、社会学という学問が実証研究に一元化されることに対して警戒心を持っていた。個別の実証調査がもたらすデータは有益なものであるが、それらを「社会」との関係の中で考察するためには「理論」が必要とされる。アドルノは個別のデータという具体的で「経験的なもの」の優位が語られる中で、それが物神化してしまい、抽象的な思弁が単に「調査方法論」というかたちのみで扱われてしまう傾向に批判を行っていた。そこで、彼は、「理論」と「実証調査」を独自に組み合わせた「批判的社会調査」というものを模索しようとした。

ここでアドルノが語る「理論」はしばしば、全体社会を交換関係が全般化した「交換社会」と見るマルクス主義的な社会理論を意味するものであると解釈される（たとえば、Benzer 2014）。このマルクス主義的な社会理論をアドルノが語る「理論」とした場合、それは調査データを位置付ける文脈としての「社会」概念がそこから用意されることになる。このような「社会」概念の「理論」的備給を「批判的社会調査」という思想の背景にあるものと考えることができるだろう。

だが、他方でアドルノは「経験 (Erfahrung)」概念の内実を問うた社会哲学的考察を多くの場所で行っており、その立場から「経験主義 (Empirismus)」への批判を行って来ている。彼は「経験主義的な加工 (empirisch Zurichtung) に対する経験の再生 (Restitution von Erfahrung)」(Adorno 1969:148) を主張している。本報告では、この「経験」概念の社会学への導入を、マルクス主義的な社会理論以外にも、アドルノが「理論」という立場の中で語ろうとしたものであると考えていきたい。

アドルノは社会学に「経験」概念が持ち込まれた際に生じる「表現」的な質について、思考を進める。たとえば、それはヴェーバーの理念型の「構成 (Kompositionen)」を「作曲」と重ね合わせながら、その意味を探る試みの中などに見ることができる態度である。「経験」の導入によって、定義上は論理構成体に留まる理念型にある種の「表現」的性格が生じるとアドルノは考えた。ローレンツ・イエーガーは、アドルノの使用する権威主義的性格者や聴取退化者といった類型があたかも小説の登場人物のような人格を帯びて存在していることを語っている。この過度に人格化された類型というものは、使用者の偏見の混入のように通常科学においてはタブーとするべきであるかもしれない。だが、本報告では、アドルノの文学論などと絡めながら、彼の社会学における「表現」的な質が社会学にもたらす可能性について、考えてみたいと思う。「〈経験的なもの〉の再構成」に対して、アドルノ社会学の「表現」的な性格は一定の意味を持つ論点であると考えられる。

【文献】

- Adorno, T. W. 1958, *Noten zur Literatur I*, Suhrkamp. (=2009, 三光長治等訳『アドルノ 文学ノート1』みすず書房.)
———. 1969, *Stichworte*, Suhrkamp.
Benzer, M. 2014, *The Sociology of Theodor Adorno*, Cambridge University Press.
Horkheimer, M, Adorno, T. W. 1988, *Dialektik der Aufklärung*, Fischer Taschenbuch Verlag. (=2007, 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店.)
Jäger, L. 2003, *Adorno Eine politische Biografie*, Deutsche Verlags-Anstalt. (=2007, 大貫敦子・三島憲一訳『アドルノ 政治的伝記』岩波書店.)